

## 6月例会「企業リーダーの脳力アップの秘訣」～三つの「り」論が人間力のスイッチをオンにする～

6月28日 於 京都府産業支援センター2F会議室

株式会社万城製作所 佐藤 拓哉

参加者数は会員27名、公益財団法人京都産業21様より2名です。

人間科学研究会 夢雲 主宰の望月昇先生を講師としてお招きし、脳科学における人の脳の思考仕組みについてのご講演をいただいた後、三つの「り」論（あり方、なり方、やり方）を脳にセットアップする為のワークショップを行いました。

ご講演では、錯視画像（複数通りの絵柄が見える絵）や脳トレ動画（画像が徐々に変化する動画）を用いて、ヒトの脳がいかにか錯覚を起こしやすいかということ、錯覚とは脳がいくつもの情報を同時に処理することでゲシュタルト崩壊（全体性が失われ、各部分に切り離された状態で認識されるようになる状態）しているものとご解説いただきました。意識をある事に集中することで、その回りの事も見えているのに、認識できなくなる。これは脳が情報処理を行う際に処理限界を迎え難くしているのです。そして意識を向けている内容がリアルであればある物ほどに、その事について見えてくる情報は大きいということでした。例えばフェラーリに乗りたいと強く想った時から、街中のフェラーリが目につくようになります。脳はセットされたイメージがリアルなもの程、現実的に現そうとする為です。

講演を基にワークショップでは、各々の企業リーダーの在りたい姿「在り方」を強くリアルにイメージすることで、どのような人物がそのように成るかを「成り方」考え、成る為の「やり方」を考え、三人一組で議論する形をとりました。この「在り方」に現状ではイメージ出来ない姿を置いて考え、考え続ける事で、ただのイメージだったものがリアルなイメージへと変わっていき、よりリアルなもの程実現させようと脳は考えるので、「成り方」「やり方」が見えてくるというものでした。

また、過去に体験した思いを自分で考えた動作に連結させることで、その時の感情を鮮明に思い出させるアンカリングという手法も教わりました。これはモチベーションの維持や、常に気を付けていたい事柄を動作から再認識させるというものです。

普段から思考する癖をつけ、今回学んだことを活かし「挑戦する」ためのスイッチをオンにしていきました。

